

自序

魯迅

若い頃は、わたしも多くの夢を見た。もうあらかた忘れてしまっただが、自分ではそれほど惜しいとも思わない。思い出というものは、人に喜びを与えてくれるが、孤独を感じさせることもある。過ぎ去った孤独な日々を精神の糸で繋ぎ止めたところで、何の意味があるだろう。わたしはむしろ、完全に忘れ去ることができないために苦しんだ。この忘れ去ることのできない部分が、今になって「呐喊なげき」となったのである。

わたしはかつて四年あまりの間、毎日のように質屋と薬局に通った。年齢は忘れてしまったが、とにかく薬局のカウンターは背丈と同じくらいの高さで、質屋のそれはわたしの倍の高さだった。わたしは倍の高さのカウンターの外から衣類や宝飾品を渡し、さげすまれながら金を受け取ると、背丈と同じ高さのカウンターに向かい、長患いの父のために薬を買った。帰宅後も別の仕事が待っていた。

処方箋を書くのが高名な医者で、使用する副薬が一風変わったからである。冬の蘆根ろこん、三年の霜を経た甘蔗、つがいだった蟋蟀せつせつ、実を結んだ平地木じへいぎなど、容易には手に入らないものばかりだった。それでも父は日増しに病状を悪化させ、ついには亡くなってしまった。

それなりの生活をしていた人間が貧困へと落ちていけば、その過程で世間の本当の姿を見ることができるようだろう。わたしがNのK学堂への進学を望んだのも、異なる道を進み、異なる土地へ逃れ、異なる人々に出会いたかったからだと思う。母は仕方なく八元的路銀を工面し、好きに使おうと言ってくれた。ただ、母は泣いた。無理もない。当時は古典を学んで科挙を受けるのが正道であり、洋務を学ぶというのは、行き場を失った人間がやむなく夷狄に魂を売るようなもので、大いに嘲笑し、排斥すべきことと世間では考えられていた。まして母は息子と会えなくなるのである。だが、わたしはこうしたことには構わず、結局Nに行つてK学堂に入った。この学校で、わたしは世に理科や数学、地理、歴史、図画、体操などが

あることを知った。生理学の授業はなかったが、わたしたちは木版の「全体新論」や「化学衛生論」などを見ることができた。わたしは以前の医者の見解や処方を読み起こし、現在の知識と比較することで、中国医学が故意かそうでないかにかかわらずペテンに過ぎないことを悟り、それと同時にだまされた病人とその家族に深く同情した。また、翻訳された歴史から、日本の維新が西洋医学に端を發しているらしいことも知った。

こうした幼稚な知識から、後にわたしは日本のとある田舎の医学専門学校に学籍を置くこととなった。わたしの夢は甘美だった。卒業して帰国したら、父のように誤診されて苦しんでいる病人を救い、戦時には軍医として出かける一方で、国民の維新に対する理解を促そうと考えていた。微生物学を教える方法が現在のどのような進歩を遂げているのか、わたしは知らないが、当時はスライドを使って微生物の形状を見せていた。このため、講義が一段落ついても時間があまっている時などは、教師が風景や時事のスライドを学生に見せ、残った時間をつぶすことがあった。ちょうど日露戦争の頃だったの

で、戦争に関するスライドがどうしても多くなり、この教室ではクラスメートの拍手や喝采によく付き合わされた。ある時、スライドで久しぶりに多くの中国人と再会した。一人が中央で縛られ、大勢が左右に立っている。みな屈強な体格をしているが、その顔に表情はなかった。解説によると、縛られているのはロシアのために軍事上の偵察を行った者であり、日本軍によって見せしめに首をはねられるところだという。周りを囲んでいるのは、この公開処刑を見物しに来た人々である。

この学年を終えることなく、わたしは東京に出た。あれ以降、医学がそれほど大切なこととは思えなくなったからである。弱く愚かな国民は、体がどれほど健康で遅しくても、何の意味もない見せしめの材料や観客になるだけである。いくらか病死したとしても必ずしも不幸とは言えないのだ。つまり、わたしたちはまず国民の精神を改める必要があった。そして、精神を改めるために、当時のわたしは文芸を推し進め、文芸運動を提唱しようと考えた。東京には法律や政治、物理、化学、そして警察、工業を学ぶ留学生はたくさん

いたが、文学や美術を修めようとするものはいなかった。それでも、冷やかな空気の中、数人の同志を見つけ、必要と思われた数人も誘って相談し、まずは雑誌を出すことになった。誌名は「新しい生命」の意味を取り、当時のわたしたちにはいささか復古の傾向もあったため、単に「新生」と名付けた。

「新生」の出版が近づくと、まず原稿を担当する数人が雲隠れし、続いて資本が逃げ出した。残ったのは三人の文無しだけである。はじめから時流に逆行していたのだから、失敗したとしても文句などないが、その後はこの三人もそれぞれの運命に翻弄され、集まって将来の夢を語ることもすらできなくなった。これが日の目を見なかった「新生」の顛末である。

わたしが経験したことのない空しさを感じるようになったのは、これ以降のことである。当初、わたしには理由が分からなかった。あとから思うに、人間の主張というものは、賛同が得られれば前進が促され、反対されれば奮起が促される。だが、見知らぬ人々の中

でただひとり大声を上げて、人々から何も反応がなく、賛同も反対もされなければ、果てしない荒野に身を置いているようなもので手の打ちようがない。それはなんと悲しいことか。そこでわたしは、自分が感じたものを孤独と呼ぶことにした。

この孤独は、日一日と大きくなり、大きな毒蛇のようにわたしの魂に絡みついた。

わたしはわけもなく悲しかったが、怒りは感じなかった。この経験が反省を促し、自分自身を見つめることになったからである。わたしは腕を振って呼びかければ、それに応える者が雲集するような英雄ではないのだ。

ただ、わたし自身の孤独は取り除かないわけにもいかなかった。あまりに苦痛だったからである。そこでわたしはさまざまな方法を用いて自分の魂を麻痺させ、自らを国民の中に埋没させ、古代に帰らせることにした。その後もさらなる孤独と悲哀をもたらす出来事

を体験、あるいは傍観した。どれも思い出したくないわたしの脳とともに泥の中で消滅させてしまいたいことばかりである。とはいえ、わたしの麻醉法が功を奏したようで、青年時代のような義憤や激昂はもう湧いてこなかった。

*

S会館には間取りが二部屋の家がある。むかし庭の槐えんじゅの木で女性が首を吊ったとされ、槐は今では登れないほどの高さになっていて、その家に住む者はいなかった。長い間、わたしはこの家に住み、古い碑文を写して過ごした。客は少なく、古い碑文の中で問題や主義にぶつかるともなかった。ただ、わたしの生命はひっそりと消え去ろうとしていた。これこそがわたしのただひとつの願いだったのだ。夏の夜は蚊が多く、棕櫚の団扇であおぎながら槐の木の下に座った。よく茂った葉の間からのぞく青空を見ると、遅れて出てきた青虫が首筋に落ちてひやりとしたものだった。

当時、たまに話に来ていたのが古い友人の金心異である。手に提げた大きな書類かばんを古びたテーブルに置くと、長袖シャツを脱いで向かいに座る。犬が苦手なので、心臓がまだどきどきしているようだった。

「こつこつを写して何の役に立つんだい？」ある夜、例の碑文の写本をめくりながら、彼が疑問を投げかけてきた。

「何の役にも立たないよ」

「それじゃあ、これを写すのに何の意味があるんだ？」

「意味なんてないさ」

「君は何か書けると思っただが……」

彼の言いたいことは分かった。彼らは「新青年」を立ち上げたと

ころだった。だが、当時はこれといって賛同してくれる者はいないし、反対してくる者もないようだった。彼らは孤独を感じているのかもしれない、と思ったが、わたしはこう言った。

「鉄でできた小屋があるでしょう。窓は全くなく、どうしたって壊せそうにない。中では多くの人が熟睡していて、そのうち窒息死してしまつたろう。それでも昏睡から死へと至るので死の悲しみは感じずに済む。今、君が大声で騒ぎ、比較的眠りの浅い数人を起こしてしまつたら、この不幸な少数の人々に救いようのない臨終の苦しみを味わわせることになる。彼らに申し訳ないと思わないかい？」

「けれど数人が起きたら、その鉄の小屋を壊す望みが全くないとは言えないだろう」

その通りだ。わたしはわたしなりの確信を持っているが、希望を否定することはできない。なぜなら希望は未来のものであり、絶対に不可能だという証明を出してきて、あり得るといふ彼の意見を論

破することはできないからだ。それでわたしは彼の依頼を引き受け、文章も書いた。それが最初の「狂人日記」という一篇である。これ以降、引つ込みがなくなくなり、小説のような文章を書いて友人たちの依頼をこまかすうち、積もり積もって十篇あまりとなった。

わたし自身としては、もう痛切に言葉を必要とすることもなくなつたと思つていた。だが、かつての孤独の悲哀を忘れ去ることができなかつたのかもしれない。そのため、時として思わず吶喊の声を上げ、あの孤独の中を疾駆する勇士が先駆けとなることを恐れぬよう励ましてきた。わたしの喊声が勇ましいか悲しいか、憎らしいか可笑しいか、そんなことを気にしているひまはなかった。ただ、吶喊である以上は軍令に従うのが当然であるため、わたしはしばしば筆を曲げた。「薬」では瑜児ユイアルの墓の上に理由なく花輪を加え、「明日」でも単四シヤンスーサーヤツの息子が会つ夢を見なかった、とは書かなかった。当時の指揮官が消極的なやり方をきらっていたし、わたし自身も、自ら苦しんだ孤独をわたしの青年時代のように夢を見ている若者に伝染させようとは思わなかった。

「こう言つと、わたしの小説と芸術との隔たりも想像がつくと思つが、今日まで小説の名を冠し、さらに一冊にまとめる機会を得られたことは、何はともあれ僥倖であるというほかない。僥倖なので不安にもなるが、世間に読者がいるというのは、やはり嬉しく思つ。

そのようなわけで短篇小説をまとめ、印刷に付すことになり、上述の理由から「呐喊」と名付けることにした。

一九二二年十二月三日、北京にて魯迅記す。

Nは南京を指し、K学堂は江南水師学堂を指す。作者は1898年に南京江南水師学堂に入り、2年目に江南陸師学堂に併設された磁務铁路学堂に入学し直した。1904年の卒業後は清国政府から派遣されて日本に留学し、1904年に仙台の医学専門学校に入学した。1906年に医学の勉強をやめ、東京に戻つて文芸運動の準備に入った。「朝花夕拾」の「瑣記」および「藤野先生」の2編を参照されたい。

作者の中国医学に対する見解である。「朝花夕拾」の「父の病氣」を参照されたい。

S会館は紹興県館を指す。北京の宣武門の外にあった。1912年

5月から1919年11月まで、作者はこの会館に住んだ。

魯迅は紹興県館に住んでいたころ、公務の余暇(当時は教育部の仕事に就いていた)に中国の古代の塑像や墓誌といった金石の拓本を収集し、研究していた。のちに「六朝造像目録」と「六朝墓志目録」の2冊を編んでいる(後者は未完)。また県館に住んでいた当時、魯迅は中国文学の古書の編集や校正の仕事にも従事し、謝承の「後漢書」、「嵇康集」などを出した。

金心異は錢玄同を指す。当時「新青年」の編集委員を務めていた。「新青年」が文化革命を提唱してまもなく、林紓が筆記体小説「荊生」を書き上げ、文化革命の提唱者を痛罵した。その中に登場する「金心異」という人物は、錢玄同を指したものである。